

《コロナ禍の記録》

令和四年度卒業生総代謝辞(午前の部)

小城 まどか
(経営学部経営学科)

やわらかな日差しが心地よく、春の訪れを感じるようになりました今日の佳き日に、私たちは大学生生活最後の日を迎えることになりました。本日は、私たち卒業生・修了生のために、このような盛大な式典を挙行していただき、誠にありがとうございます。

また、ご多用の中ご臨席を賜りました佐々木学長をはじめ、松木理事長、日高総長、教職員の皆様、並びにご来賓の皆様、卒業生・修了生一同心より御礼申し上げます。

四年前の春、今と同じこの武道館で入学式を迎え、新しい一歩を踏み出しました。入学当時の私にとって、大学生活は未知の世界であり、学習面・友人関係全てに対して大きな不安を抱いていました。同時に、憧れのキャンパスライフやこれから始まる大学生活に期待を膨らませ、意気込んでいたことも思い出されます。

振り返ってみると、一生ものの出会いと学びが得られた四年間でした。多様なカリキュラムや選択肢に満ちた大学では、興味ある分野を追求して学んだり、新しい学びに挑戦したりすることができました。四年間を通して、学問の奥深さや学ぶことの楽しさを実感し、自分の考え方や見識に深みを与えてくれました。

しかし、大学生活は万事順調ではありませんでした。新型コロナウイルス感染拡大により、何気ない日常が



令和4年度卒業式（午前の部）総代・小城まどかさん

奪われ、キャンパスに通い友人と顔を合わせて勉学に励んだ生活も、わずか一年限りでした。人との交流が制限され、受講方法に不安を抱えたままオンライン授業が始まり、手応えを感じることもままならない状況に強い寂しさも感じました。

一方で、新型コロナウイルスによる一変した環境も、決して悪いことばかりではありませんでした。これまで直面したことのない環境の中で、自分はどう過ごしていくべきなのか、いま何ができるのかを考えるきっかけを与えてくれたように思います。先行きが見えない不安のなか、自身を成長させるための努力を続けたことで、困難や逆境にも決して屈しない心が培われたと確信しています。

また、友人や仲間など、互いを励まし合い支え合う存在の大切さを再認識し、つながりを持つことの幸せを強く実感できた期間でもありました。二年間のゼミナール活動には多くの力を注ぎました。私は、管理会計のゼミナールに所属しましたが、ゼミナール活動を通して得ることができたのは、学問の知識だけではなく、課題を分析する力や論理的な思考力、物事を一つ一つの別のものとして捉えるのではなく、つなげて考えることの大切さをも学びました。ゼミナールで仲間と互いを認め合いながら学んだ日々と、指導教員との出会いは、私にとって財産であり、大学生生活を語る上で欠かせない思い出です。

本日、私たちは未来への希望を抱き、それぞれの新たな道へと旅立ちます。現在はVUCAと呼ばれる時代であり、変化が激しく、取り巻く環境の複雑さが増し、将来予測が困難な時代です。卒業後も学びや成長の機会は尽きず、専修大学での学びを自信に、そして経験を土台として、卒業生・修了生皆が躍進できるこ

とでしよう。

コロナ禍という前例のない道を進んできた私たちだからこそ、困難を乗り越える力や新しい時代を生きる力、そして一人ひとりの可能性を信じて、未来への一歩を踏み出します。

最後になりますが、かけがえのない学生生活を送ることができ、本日卒業の日を迎えることができましたのは、学生一人ひとりに寄り添い温かくご指導くださった教職員の皆様、苦楽をともにした仲間たち、いつも温かく見守り背中を押してくれた家族のおかげです。卒業生・修了生を代表して心より御礼申し上げます。

そして、私たちの母校となる専修大学のさらなる発展を祈念し、謝辞とさせていただきます。

令和五年三月二十二日